

海外の女性研究者との出会い

富永智津子（宮城学院女子大学教授）

「アフリカ女性史に関する基礎的研究」（国立民族学博物館地域研究企画交流センター連携研究研究会）が発足して3年目に入ろうとしている。メンバーは16名。これまで、8回の研究会を開催し、海外で活躍する6名の女性研究者を招くことができた。今、振り返ってみると、研究会の内容もさることながら、彼女たちとの出会いの、何と豊かで、刺戟に満ちていたことか。

著書や論文からは、彼女たちのエスニシティやアイデンティティは知るよしもない。研究会の当日、初めて顔を合わせて、そのおよその見当をつけることができる。2日目、3日目になって、エスニシティやアイデンティティを確認し、複雑な感慨を覚えることもしばしばだ。

たとえば、Aさんがアフリカ系アメリカ人であることを知ったのは、研究会の当日だった。誰もが「白人」を想定していたのだ。奴隷だった祖母、父の暴力、それらが彼女の関心をアメリカ黒人社会のジェンダー問題やキクユ女性史に向わせる原点になっていた。

タクシーで到着したBさんを、その窓越しに初めて見た時は、日本人かと見間違えた。教科書通りならば、「カラード」。しかし、彼女のアイデンティティは「ブラック」だった。今は、オランダに移住して、オランダ国籍を取得している。

Cさんの名前は以前から知ってはいたが、国籍もエスニシティも見当がつかなかった。1960年代にタンザニア人と結婚したアメリカ生まれの「白人」系の女性で、現在はタンザニア国籍であることを、この研究会で初めて知った。英語で報告しながら、時々スワヒリ語が混じるほど、タンザニア社会に溶け込んでいる。

アフリカ社会を研究するには、その社会に触れることが必須条件であるように、研究の成果をより深く理解し、評価するには、著者その人を知り、その人の〈物語〉を知ることが必要だ。研究の視座や分析方法の設定には、研究者のアイデンティティや立場が否応なしに影響を及ぼすからである。としたら、われわれ「日本人」のアフリカ研究は、どのようであればならないのか。また、「日本人」としての「制約」を免れないとしたら、アフリカの女性史にどのように向き合えばよいのか。そして、その研究の成果とは、いったい誰のためのものなのか。

さまざまなバックグラウンドを持つ海外の女性研究者との出会いは、いつも、踏まえるべきアフリカ研究の原点を、わたしに、思い起こさせてくれる。だが、それらがいずれも容易には回答が出ない難問であることも身にしみて感じている。